

令和5年度第1回さいたま市アーバンスポーツ研究会 議事録

- (1) 開催日時 令和5年6月1日(木) 10:00～12:15
- (2) 開催場所 さいたま市大宮区役所大会議室(201・202会議室)
- (3) 出席者 鎌田委員、久世委員、小林あいか委員、小林賢太郎委員、
佐藤委員(会長)、田中委員、増永委員(副会長)
欠席者 なし
- (4) 議題 さいたま市におけるアーバンスポーツの方向性について
- (5) 公開・ 公開
非公開の別
- (6) 傍聴者の数 0人
- (7) 会議資料 ・次第
 ・資料1 さいたま市アーバンスポーツ研究会委員名簿
 ・資料2 さいたま市アーバンスポーツ研究会設置要綱
 ・資料3 さいたま市の取組について
 ・資料4 ルール・マナーの普及啓発チラシ
- (8) 議事内容
- ① 開会
 スポーツ文化局スポーツ部長より挨拶
- ② 委員及び事務局紹介
 委員及び事務局について紹介
- ③ 会長等の選出
 ■ 互選により佐藤委員を会長として選出
 ■ 会長指名により増永委員を副会長として選出
- ④ 議題
 さいたま市におけるアーバンスポーツの方向性について
 ■ 資料説明
 事務局より、資料3に基づき説明

■ 意見交換

【久世委員】

アーバンスポーツの対象者や、アーバンスポーツという言葉はどこまで市民が知っているか、アーバンスポーツを振興する目的・対象、イベント開催時にどう人を集めるか、について伺いたい。

剣道では学校の体育館を利用させてもらっているが、なかなか人が集まらない。サッカーや野球等、いろいろなスポーツがある中で、どう子どもたちに参加してもらうかが課題。

【田中委員】

アーバンスポーツは、プレイヤーは多くいるが場所がない状況。生涯スポーツとして年齢に合った楽しみが出来ることがアーバンスポーツの魅力の一つ。対象年齢といった考えは、基本的にはない。

【鎌田委員】

さいたま市の施策としては、子育て世代がターゲットとなっている。子どもが遊べる環境が無くなっている中で、親子が一緒にできる環境を作っていく、子どもたちがスポーツに触れる選択肢を増やしていく、という段階にある。アーバンスポーツを楽しんでもらいつつ、それらが育ってくるから、アーバンスポーツの振興になっていくという考えを我々は持っている。

【事務局】

アーバンスポーツ活性化事業では、子どもとその親世代を対象としている。理由は30～40代のスポーツ実施率が低いため。アーバンスポーツは、必ずしも勝敗にこだわらない部分や、気軽に組み入れるといった利点がある。また、子どもと一緒に実施してもらうことで、当世代のスポーツ実施率を向上させることが狙い。アーバンスポーツがどれだけ認知されているかについては、オリンピック種目となったこともあり、聞いたことがある、やったことがあるという人は増えていると思われるが、メジャースポーツと比較すればまだまだ少ないのが現状。

【佐藤会長】

ルール・マナーの啓発について、チラシ配布後の評価について、肌感覚でいいが、子どもや親の変化は感じられたか。

【事務局】

どれだけ浸透したかの調査は実施できていない。今年度効果を検証することを検討している。

【久世委員】

この研究会で対象とするスポーツは、スケートボード等についてなのか確認したい。参道でスケートボードをやっている人がいて、周りの方は嫌な目で見ていた。

【佐藤会長】

対象としては、資料の3競技（スケートボード・BMX／キックバイク・インラインスケート）となっている。

【久世委員】

範囲が狭い。それであれば、私は感心しない。

【田中委員】

アーバンスポーツに対する認識がよくないものであるとは、私も考えている。それを変えていく環境づくりのための研究会という認識。街中でスケートボード等をしている人は、注意されたら、移動してまた別の場所でやる。堂々巡りの状態。自分のメーカーのBMXを買っていただいた人からも、できる場所を聞かれるが、答えられずもどかしい。本研究会の目標として、マナーを守って競技ができる場所を1箇所整備できるとよい。

【鎌田委員】

体験会等を通じて、これからアーバンスポーツに取り組んでいく子どもたちにルール・マナーを伝えていくことが重要。環境が整ってきたときにも、ルールが分かっている子どもがやっていく。その上で、競技としても趣味としても実施できることが、アーバンスポーツのいいところ。

【久世委員】

そうすると、この研究会では施設ありきの結論になってしまう。

【佐藤会長】

鶏が先か卵が先かというところもあるが、社会が理解してくれる、受け入れてくれる、やる人が増える。そして見る人、支える人を増やしていく。そうして施設ができるという方向で、競技振興についてご意見をいただきたい。

【小林賢太郎委員】

さいたま市でイベント等の取組みを実施している中で、主力としている3種類の愛好家の人数を伺いたい。また、「やる場所が欲しい」や「継続的な活動を実施してほしい」等の声はどれくらいあるのか。

【事務局】

市内の競技人口の統計は取れていないが、イベント時のアンケートでは好評いただいているところ。また、イベントとは別の形で、場所の整備に関する要望もある。少しずつではあるが、競技人口は増えているという所感。

【小林賢太郎委員】

社会の要望や理解があって施設が出来たとしたいところ。アーバンスポーツはもともとストリートからスタートしているスポーツであり、ストリートでやることに生きがいを持っている人もいる。施設ができて、ストリートでやることを100%防ぐことはできない。ただマナーを良くしましょうではなく、実際の違反や罰金等により警察にお世話になった事例と合わせて、リスクも正しく伝えていくことが重要。久世委員の、アーバンスポーツとはそもそも何か、子どもたちや社会への影響がわかりにくいといった声は、この委員会では大事な事。マナーの話としては、さいたま市での取締り件数等を把握して、理想とのギャップをどう埋めていくか話がしたい。第2回目の資料として、取締り件数等のさいたま市の現状が分かる資料があるとよい。

【佐藤会長】

競技普及としての「わかりにくさ」とは、種目が多くあるからわかりにくいということなのか。

【小林賢太郎委員】

BMXやインラインスケートの中にもいろいろな種目がある。また、勝つことを目的とする人もいるし、生涯スポーツとしてやる人もいる。何を目的とするかは、その人の自由。

【佐藤会長】

市としてアーバンスポーツを現在の種目としている理由はなにか。

【事務局】

スケートボード、BMX・キックバイク、インラインスケートだけでなく、けん玉やダンスといった子育て世代が取り組みやすい種目も、アーバンスポーツとして一緒に体験教室を実施している。

【佐藤会長】

競技普及についての今年来年のイベントについて、何か意見はあるか。

【小林賢太郎委員】

スクールキャラバンについて、学校施設を継続的に使用すること、地元の指導者を育てていくことを目的に、静岡で実施していた事業がある。体験した子どもたちの学校でどう継続できるか、誰が担えるのかという点で、さいたま市でも継続的に実施することを見据えて取組むといいのでは。

【佐藤会長】

スクールキャラバンの内容、体験イベントとの連関という点についても、意見があればいただきたい。

【小林賢太郎委員】

体験イベントについても、月1回の実施でもいいので、継続性を持たせたいところ。

【佐藤会長】

継続性と内容についてということで、スクールキャラバンでは数種目をミックスでやっているのか。

【事務局】

プロ講師のパフォーマンスをみる時間と、体験する時間に分かれている。パフォーマンスとしてはBMX・ダンス・ダブルダッチを実施し、体験としてはダンスとダブルダッチを交代しながら児童全員に体験いただく。

【鎌田委員】

学校が学習等で継続してできる環境を作ること、普段の学校では習わないスポーツに触れる機会を設けることで、子どもたちの選択肢を広げる場所とすることが必要。スクールキャラバンの先に体験イベントがあるが、そういった活動を通じてカルチャーコミュニティを作り広げていくこと、地域の理解を得ることが大事で、その先に環境整備があると考ええる。

【佐藤会長】

スクールキャラバンでは、保護者を通して地域に理解いただけるような趣向を取り入れるということ。継続性の点では、例として、スクールキャラバンを実施したその日のうちに、学童と協力して何かイベントをしても面白いのではないかなと思う。また、社会の理解を得るための指導方法について、何か意見や事例の提供はあるか。

【小林賢太郎委員】

指導者が指導者足り得る根拠はどこにあるのか、何をもって良し悪しとするのかっていうところまでになってしまうと、アーバンスポーツに絞ってというのは難しいところ。アーバンスポーツは楽しいだけでやらせる時間が重要であり、運動が苦手とされてしまっている子どもの受け皿になれるところ

がすごく魅力的な部分。指導方法をはっきり決めてしまうのでは、アーバンスポーツの魅力が損なわれてしまう。

【佐藤会長】

スクールキャラバンに対する研究会の意見として、目的を明確にし、運動の楽しさを子どもに知ってもらうこと、それを通してマナーを守れることを前面に出したらどうか。また、目的としたことが達成できているかを計測することで、来年・再来年に繋がるのではないかな。

【田中委員】

スクールキャラバンでは、自分自身、運動が苦手だったこと、たまたまBMXに乗って、自分に合ったものを見つけることができたこと、探し続ければ自分に合ったものを見つけられること等を話している。また、不登校だった子がBMXに出会って世界チャンピオンになった例もある。自信がついて学校にも行けるようになった。放課後児童デイの子を対象にBMXスクールを実施したら、ほとんどの子が補助輪なしで自転車に乗れるようになった。スクールキャラバンが、運動を諦めた子や難しいと感じている子の何かのきっかけになればいい。

【佐藤会長】

アーバンスポーツによる効果の社会への周知方法について、次年度の課題になるかと思う。悪い例も提示すると社会は理解してくれる。メリット・デメリットを提示する機会を、来年度何らかの形で考えてみたらどうだろうか。また、体験イベントについて、スクールキャラバンと比較して、アーバンスポーツ自体の色を強く出すという棲み分けが考えられると思うが、いかがか。

【増永副会長】

スクールキャラバンについて、実施してみて学校側に変化は見られたか。

【事務局】

元々実施に関して抵抗感がそこまで無かった学校ではあるが、好評いただいている。

【増永副会長】

スケートボード等の種目は学校では難しかったか。静岡ではインラインスケートを体育館で実施しているという話があったが、何か課題は。

【小林賢太郎委員】

イメージで許可が出ない期間は長かった。やる子が増え、検証等もして、市から認めてもらえた。市主催のイベントも盛況だった。それから公共の体育館の使用許可が出た。ただ、学校の体育館の使用は校長先生による部分が大きい。

【増永副会長】

床への影響も考えられるか。

【小林賢太郎委員】

そういった心配をされている方が多い。

【増永副会長】

最初の方で場所がないという話が出たが、学校は地域に身近な施設であるので、そういった場所が使えるようになると、わざわざ施設を作る必要もなくなる。体験イベントでやっている内容をスクールキャラバンにも組み込む

ことで学校側の懸念が払われれば、学校や地域に理解してもらい、場所も増えていくといったやり方もあると思う。

【佐藤会長】

スクールキャラバンと体験イベントのリンクについてご意見は。

【小林賢太郎委員】

自分では来ることができない子たちのところに行けるのがスクールキャラバンの良い点。そこで、もっとやりたいという子に対して、その後の体験会の宣伝ができれば、子どもたちの行動も広がり、できる機会も増える。そういった連携が一番いい。静岡でも、学校で実施した際に、その後に実施予定の体験イベントの宣伝を行った。体験の内容としては、学校でのコンテンツと体験イベントのコンテンツを同じジャンルのものでした。

【鎌田委員】

スクールキャラバンを2校実施するのであれば、その2校の近くの地域で体験イベントを実施することで、地域交流になり、カルチャーコミュニティが作られる。体験イベントでスクールキャラバンとは異なった種目を実施すると、子どもたちの選択肢も広がる。スクールキャラバンから体験会まであまり時間を空けずに、子どもが来やすいように。子どもが楽しんでいる姿を見て、親がやるきっかけにもなることで、子育て世代のスポーツ実施率向上につながるこれがベストな形。

【小林賢太郎委員】

静岡では、協力したいという保護者にイベントの運営を手伝ってもらった。アーバンスポーツができる環境を整えるためには、やりたい人が労力をかける必要があるというところで、彼らが主役となるように、継続的な活動に結びつけている。

【佐藤会長】

動画コンテンツの配信についてご意見はあるか。

【鎌田委員】

初歩的な動きとか、体験会でやった課題をおさらいできるもの、宿題的にできるもの等を作成したケースはある。体験会との連関で作成した。

【佐藤会長】

以前はバスケットボールを取り入れた例もあるようだが、最初の方に話のあった今あるスポーツとの協力関係づくりについてはどうか。

【小林賢太郎委員】

話のネタとして、インラインスケートを川崎のサッカーチームが体幹トレーニングとして採用していた時期があった。レクリエーションしながら基礎トレーニングをするといった形。

【増永副会長】

いろいろな競技に共通する、体幹トレーニングやストレッチ等のトレーニングを、社会人野球の方に来ていただいて、野球ではなく、そういったトレーニングをしていただいたということはある。いろいろな競技に共通して取り組める、ここを強化すればここが良くなる、といったものであれば興味を持ってくれると思う。

【佐藤会長】

アーバンスポーツに特化せず、他のスポーツとの関連を図る企画を入れたらいいのではないかという共通理解だったと思う。

【田中委員】

動画配信に関して、どんなイベントが開催されたかを動画で配信することがよいのでは。アーバンスポーツの How to 動画は、ネット上に山のようにある。次回の体験会も来てねと繋げたほうが直接的である。

【鎌田委員】

周知を考えるとそれがよい。親御さんも動画を見てイベントの内容を知り、安心に繋がる。

【佐藤会長】

いいこと悪いことを提示することで啓発にもなり、市が啓発に取り組んでいることも理解いただけると思う。

今あるものについて重点的に話をしたので、来年度、予算を確保して実施すべきことについて、ご意見いただきたい。

【小林あいか委員】

広報的な面で、大きな大会の開催時に子どもを招待するとか、エスコートキッズを市の子どもにやってもらおうとか、そういったことは印象に残ると思う。また、別業界で分かりやすい合言葉を作って、マナーを伝えていると聞いた。分かりやすいキーワードがあるとよいと思う。

【佐藤会長】

行政に頼るだけでなく、啓発のためのコンテンツを現場で、あるいは協力して作っていく。スクールキャラバンで実施した啓発で子どもに変化があった事例を積み上げ、啓発のコンテンツとして大々的にPRしていくことも来年度できたらいいのではないかと思う。

【小林賢太郎委員】

マナーについて、静岡ではショップや施設管理者にマナーブックの配布をお願いしている。周辺のコミュニティの核になっていることが多いので、ターゲットと効果的な配り方を捉えた上で配布を集中投下したほうがいい。また、アップデートのために、警察での事例など、社会的調査を実施いただきたい。マナー・エチケットと言っても、リスクが分からないと止めないので、法的にアウトな事例をリスクとして提示していくとよい。実際に罰金が発生した例などがあるので、保護者や取組んでいる子に示すとリスクがしっかり伝わる。

【佐藤会長】

ターゲットを絞っていくということと、何を活用するか。利用者啓発の方法の検討が、来年度の課題というところ。

今年度及び来年度の競技普及、ルール・マナーの啓発に関する取組みについて、多くの意見を提示した。

以上で、本日の議事は終了とする。

⑤ 閉会

(9) 問合せ先 スポーツ文化局スポーツ部スポーツ政策室
TEL 048-829-1737
FAX 048-829-1996